



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リュティ著「フランスの時差」 : Luthy, The State of France
Author(s)	小川, 晃一; OGAWA, K
Citation	北海道大學 法學會論集, 9(4), 31-51
Issue Date	1959-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17060
Type	departmental bulletin paper
File Information	9(4)_p31-51.pdf



リュテイ著

「フランスの時差」

— Litty, The State of France —

小川 晃 一

「戦後、フランスについて書かれた著作のうち最も優れたもの」これがここに紹介する著作の一般的評価である。それは、一九五四年一スイス人により出版されて以来（原名 *Frankreichs Uhren gehen anders* 「フランスの時差」1954）既に数国で翻訳されるに到っている（ここで用いる版は E. Mosbacher の英語訳 *The State of France* である）。この書のテーマは要約すれば次の如くなる。フランスには、一方に、現代的課題への適応を頑強に拒否し、古い停滞的なメカニズムを維持しようとする勢力、他方に現代的課題にこたえ、社会を新しいダイナミックな方向に向けようとするメカニズムや勢力が存在する。この二元性は旧くから存在した。だが、解放直後のフランスは確かに新しい方向を旨ざしていた。そしてそれ以後もこうした志向は消滅してしまつたことはない。しかし、第四共和制が進むにつれて、古い勢力の頑強な

抵抗は遂に勝利を収め、新しい勢力は後退してしまつた。ダイナミックな政治の停滞、つまり「政治の休業」は、五十一年選挙及びビネー内閣の成立で一応完成する。リュテイの叙述は年代的には五十三年のラニエル内閣（追補ではマンドス・フランス内閣）で終つている。それ以後フランスは、第四共和制の崩壊、第五共和制の出現という「政治」の嵐を経た。こうした情況では、「政治の休業」で終つているリュテイの著書は既に「古典」の域に入つたかも知れない。しかし、この著書は単なる政治年代記ではない。それはフランスの——政治以上のもの——文化構造全体に互る分析であり、批判である。こうした社会構造は新しい共和制によつて解決さるべき課題として今も残存しているし、加うるに「政治」化自体「政治の休業」の反動、寧ろこの「休業」から生起したのであつた。しかもリュテイによるド・ゴール描写は、現

在の政治の動態を理解する上で極めて貴重なものとなるう。

紹介は、著書のエスプリに沿つて相当任意的に構成した。(紙数の制限と著書に繰り返えしが多々あることもこの理由である。)とりわけ、イデオロギーとド・ゴールに關聯する紹介はそうである。リュテイは「ヨーロッパ」の理念、植民地問題に相当の重点を置いて叙述している。がここでは独立に紹介せず、各所に簡単に挿入することにする。

* リュテイは一九一八年スイスに生れた。チューリッヒ及びジュネーブ大学で教鞭をとりながら、ジャーナリズムに多く寄稿した。現在国際雑誌(MonatやCommentary)のコレスポンデントである。彼はモンテーニエのエッセイの新版に序言を書いたこともあり、思想の理解にすぐれた関心をもつている。本書も思想的アプローチを大いに駆使していると思われる。現代政治にうとい筆者が敢て紹介する理由でもある。

一 a

旧いメカニズムないし旧い勢力から始めよう。

フランスにおいて最も古く(中世)から存続し、今も益々發展しているメカニズムは、集権的「行政」ないし官僚機構である。リュテイはこのテーマに一章(Part I, chap. 2)をささげており、彼の叙述は極めて興味のあるものであるが、その新しさは現代政

治とのコンテクストで論ぜられているところにあると思われるから、ここでは独立に紹介せず、以下の紹介の中に折り込むことにする。先ずリュテイによるフランス經濟の分析を紹介しよう。

(主として P. IV, chap. 2, 3)

一国の文化の中で重要な要素の一つが經濟であることは云うまでもない。リュテイも經濟構造ないし經濟のメカニズムをば、政治その他の文化形態と到る所で聯関させている。ところで、あらかじめ注意すべきことは彼の經濟現象の分析が、ドグマチックな構成をではなく、實態に即した分析を目ざしている、ということである。實際彼にとつては、マルキシズムの神話を排除することが問題なのであつて、彼はフランスでは、自由主義ないし資本主義的な市場も生産も形成されていないとしている。フランス經濟は「擬」自由主義ないし資本主義であり、「擬」社会主義であり、それを「擬」たらしめているものこそプロテブル及び農民なのである。

フランスにおいては、小売商——「ジャンジャンブルのフランス」——は極めて重要な地位を占めており、彼らの数は現在絶對的にも相對的にも増大している(三十九年から五十年迄に三十万つまり三分の一だけ登録商人の数は増加した)。彼らが所得の源泉としているものはフランス特有の價格のメカニズム、つまりインフレによる價格差である。ところで、需要が減る場合、もし自

由市場が形成されているなら、価格はやがて下落するであろう。ところがフランスではこうした自由市場のメカニズムは存在しない。生産者は価格を下げてても需要を増大させようとするだろう。ところが商人は営業高をへらし、その代り単位当りの利潤率を引上げる。こうした小売商の価格「操作」、というよりは慣習となつた営業方法によつて、小売価格は需給の法則に従わず、騰貴する一方である。こうしてインフレは価格のメカニズムの一環ではなくなり「構造的」なものにまでなつた。フランスで「よくなる見込のある」唯一の職業は「ビジネス」のみである。こうして、商人は実は、価格のメカニズムによりかかつた寄生的存在であるといふことができるが、このメカニズムの「インパーソナル」な性質によつて、自己が寄生的であるといふことを、自己にも他人にも隠蔽することができる。彼らの自負や幻想はこのようにして存続しているのである。こうしたことがいかに偽囂であるにせよ、複雑化しルーティン化した経済構造の中に遍く滲透している寄生的身分に較べれば、肯けるかもしれない。フランスの店舗は屢々三家族を養つていると云われる。即ち店舗の所有者、転貸人及び商店経営者である(パリ・ホールや建築業のメカニズムも屢々引用されている)。商人の価格「操作」は、フランスでは通常予想されるような消費者の抵抗に遭遇しない。それは半ば承認されてお

り、いわば商人の社会的特権ともなつてゐる。しかも彼らの特権的地位は国による保障をうけてさえている。租税制度はこうした保障の典型であつて、租税免除により「経済的弱者」に特権を与えている。更に、脱税はノーマルな状態として放置されていた。

こうして商業が寄生的となり特権的となつてゐるとしても、それはなんら例外ではなく、製造業や農業も同様である。それらは保護関税制により、廉価な外国商品との競走から免れる。農民に對する国家の保護は特に厚い。農産物には価格の維持が計られ、工業製品との価格差をなくするスライド制さえ存在する。また、テンサイ、アルコール原料等の農産物は国家の買上げによつて市場を保護されてさえている。更に、租税免除、とりわけ半公認の脱税(申告額の七〇パーセントと云われる)によつて彼らは保護されるのである。

このように寄生的特権的となつたブチブルや農民は、企業精神を喪失しており、技術改善その他の合理化に対する意欲を余りもたない。このため寄生と特権は益々加重されるというわけである。實際「経済的弱者」に陥つてゐる彼らは極めてねばり強い抵抗を行つてゐる。シャンシャンブルの「圧力」団体はこうした抵抗の「公」的組織化である。こうした抵抗が有効であるだけに、それは企業の合理化を阻んでいる。だがそれは更に、国全体の産業の

発展を阻み、ついに精神的な頹廢をも促している。国家により買上げられた莫大な農産物は文字通り捨て去られる。租税は大企業から徴収されるが、大企業は、賃銀引下げにより労働者に、価格引上げによつて消費者に負担を転嫁してしまうといつた具合である。(大企業の「徴税請負人」的機能)。こうして最も公正な租税は間接税だとされてしまう。

フランスのプチブルや農民は金を貯えるのが巧いといわれてきた。彼らがかつて「ランティエ」階級の主体をなしていた。「美德と悪徳、勤勉と節約、愛国心と狭量、政治への信頼、こうした性格をもつたプチブルはフランス社会の基礎的要素であつた」。ところが彼らの中かたりのものは貧困に陥つてしまい、現代では彼らは「経済的弱者」といわれている(外見のよさにしがみついてはいるが)。彼らの没落は、一次大戦後の中部ヨーロッパと異なり、急激には起らなかつた。没落は、外見上は安定を保ちながら緩慢に間断なく起る過程であつた。この過程で彼らは次第に変質した。新しい型のプチブルは、勤勉と健康さを失ひ、寄生的となり、既得の地位にしがみつき、そのためあらゆる経済的政治的手段に訴える。彼らは国家やフランスを信用して国債を買うことをしなくなつた。無理やりに手に取めた所得を、金にかえて文字通り壁の中に蔵い込んだり、半ば非法的に外国通貨と挽えてしま

つて、国際収支を悪化させる。数年来のこうした悪化はマーシャル援助(これとほぼ同額のもの)を彼らは流出させたといわれる。軍事援助費の転用、EPUからの負債によつて填められてきた。こうした措置が国の威信を低め、ひいては一國の独立の問題にさえなつてしまうことは言うまでもない。だがプチブルは國家の運命などにはつゆ程の良心の苛責を感じない。彼らは没落しつつあることを知つてゐるから「階級意識」をもち、「階級闘争」の準備を怠つたことはない。この世で重要なことといつたら特権と免除を分配するセンターたる議会や政府で重要な地位を得ることではない。

プチブルや農民のキャラバンは異常なまでの連帯感をもち、国民経済の中の弱者でありながら全体のベースを決定している。フランス経済の実体は実は自由主義でも社会主義でもない。それは自由主義のカリカチャーでもあれば(プチブル)社会主義のカリカチャーでもある。ある経済関係の一委員はこういつている。「フランスは、計画経済による規律も自由競争による規律もともに拒否し、『獲得された地位』の保護に基づく統制経済を選択した。長い期間に亘るこうした保護の後現在急に国内及び国外での競争を復活させる場合、フランスの構造は五カ年計画以上に革命的結果をうけるであろう。」左翼の人たちは、フランス経済の実体から生れてゐる危機を「二百家族」の責に帰してしまふ。これ

は完全な誤りではないにせよ、極めて的はずれであろう。たとえ二百家族が追放されたところで、フランス経済の危機は依然として残るのである。

一 b

イデオロギーとインタレスト（主として P. I, chap. 3, 4, P. II, chap. 6, P. IV, chap. 5）

フランスには古くからの行政の伝統や保守的な社会がある。だがそれらとともに大革命以来の革命の経歴もあることを見落せない。否、これが真の伝統であるとすら考えられている。では革命の伝統は新しい社会を生み出す発条を提供しているだろうか。

現代においても過去の革命は単なる過去の思い出にすぎないものとはなっていないし、当時のイシューも未だ消滅してはいない。それは進歩と反動、左翼と右翼、反教権主義と教権主義等を分ける基準を今なお与えている。しかもそれは言葉以上のものであり、現実の政治を動かしている。共和制が危機に晒されるとき革命の伝統が呼び出されるのは最もよい例である。ジャコバンの信条は急進黨員によつて恐れけもなく公言される。彼がバステイユの攻撃を新たに呼び起し反動の危機を葬るべき決意を公言するとき、聴衆は歡呼する。急進党と共産党のイデオロギーはニュ

アンスがあるにすぎず、エリオとカシャン、ダラデイエとトレーズとは同じ象徴を苦もなく発見することができる。こう考えるとき革命の伝統はダイナミックな機能を果たかみえる。だが。

革命の伝統は、度重なる革命を国民が身をもつて体験し、この体験を集積することによつて形成された。この過程は文字通り家族の中で父から子へと次々に伝えられる伝承の過程であつた。伝承の過程は神話化実体化の過程であつた。情況はこの神話にリファアされることによつて理解される。つまりフレイム・オヴ・リファレンスが過去を基準にして同一化してしまつたのである。大革命以来の大きな闘争が総て同一の闘争のくり返しであるという観念はこのことをよく示している。こうして大革命は「イデオロギー」となつてしまつた。ところでイデオロギーの同一性は対応する情況の同一性を勿論前提とする筈である。大革命以来の革命と反革命の闘争は確かに大革命後一世紀を経てもお存在した。ドレフェス事件や反教権主義闘争はこのことを物語つている。だが、「フランスの右翼は少なくとも世紀の交わり以来政治的要素としては問題にならなくなつた。アクション・フランセーズやそれに関係のあるグループは旧い右翼の戯画にすぎなかつた」。今日では右翼は民衆の動員を断念し、「ミリュ」*の中に引き籠つてしまつた。とすれば、革命の伝統から生れたイデオロギーは対

応する情況を失つて、本来の機能を果せなくなつてしまつてである。〔「イデオロギー」化〕。

伝統的な革命のイデオロギーの無効性は、それがもつ他の性格のため益々加重されている。即ちこのイデオロギーは単に一定の政治行動の要請に限られないのであつて、文化全体に一定の方向を課する。それは文化全体に亘る一定の価値及び行動体系であつて、しかもその総ての要素は「一つにして不可分」である。クレマンソーの言葉を使えば「革命は一つのブロックである。」そしてこれはもう一つの反革命のブロックに対立する。ところが、情況の変化によつて、双方にまたがる要素が出現するとき、こうしたブロック観は消滅するか、そうでなければ、情況を困乱させてしまふ。戦後におけるMRPの出現は、伝統的ブロック観を混乱させてしまつたが、ブロック観の残存によつて政党的多元性は加重されてしまつたのである。

このように、戦後における古い情況の消滅、新しい情況の出現は、伝統的な革命のイデオロギーの本来もつていた機能をまひさせてしまつた。急進党は最早急進的ではなく、MRPは新しい情況においては急進党より急進的でありうる。^{*}共産党はどうだろうか。共産党が抱く大革命の未完成感が急進党の場合と異なつてい

もち「よかりし時代」をもつてゐる。共産党の場合にはこうした「よかりし時代」の感覺はなく、指導者にとつて大革命は、ブルジョア革命につながるべきとされるが故にのみ伝統とされている。しかしながら、共産党を支持している大衆、とりわけ労働者以外のもものが、マルキシズムの共産党を支持しているとは必ずしも云えない。彼らが志向するイメージは屢々伝統的なものである。このイメージと現実との距離に不満を抱く彼らにとつて、共産党支持は単に不満のはけ口であり、しかも屢々（南部農民）旧くから伝統的となつてゐる権力一般への反撥という行動様式以上に出るものではない。とすれば、「革命の党」である共産党への支持は直ちに新しい情況への適応可能性を意味してゐない。^{**}

革命のイデオロギーが機能しえる情況が既に著しく消滅してしまひ、しかもそれが新しい情況で真に革命的なイデオロギーを生み出してゐない、にも拘らず、依然としてそれが語られ、それにより政治が動かされている、とすればこのことは何を意味するだろうか。勿論フランス人が新しい情況適応に失敗しているといふことになる。しかし、この失敗は、実はイデオロギーが確信され強行されるといふことではない。イデオロギーの「機能」にはフランス独特のものがある。

七十年に亘る共和制の中、議會は一貫した政策を追求するの

必要な多数派を形成したことはなかつたし、政府もこのために必要な期間続くこともできなかった。こうした事態ではイデオロギーは何の実効もない。それはこうした無償性の故に単なるレトリックとなり、単なるレトリックであるが故に、逆に無制限に表明されるのである。しかも、この結果として起るイデオロギーの過多のために、それらは互に相殺され、これがまた逆にレトリックを増す、といった具合である。政治上の論争にはミニマムの客観性や真執さもなく、実現可能なものと不可能なものとの区別もなく、また論敵の尊重もない。こうしてイデオロギーは、現実的な政策とかみ合わされる心配がないために、イデオロギー論争はフランス人にとって魅力あるゲームとなり、逆説的に大衆を同化させることができる。大衆の象徴への同化（政治運動の形でさえ）はあるが、象徴に示された政策の実現とかみ合されていない。

こうしたことの裏には、実はなんらのイデオロギーをもうけつけない政治の舞台があるのであり、ここでは頑迷且つ無責任な保守主義と利己的なパロキアル・インタレストの追求が濶歩しているのである。高遠で抽象的な原理を放言する裏面では、政治家は特殊利益への無抵抗感やスキャンダルをもつている。実際「特殊利益が狭ければ狭い程、言明された原理とかち合う心配はない」

のだ。「農産物補助金、価格維持、ローカル線設置、租税軽減、地方産業のための関税措置等」伝来の構造の作為的保守と、国民全体の発展への情熱との間に起る衝突には微塵の良心の苛責も感じない。「右翼」程イデオロギーはより薄く特殊利益はより大きくなる、がそれもニュアンスの差でしかない。大実業大産業の連合は伝統的に「中央左派」と云われたグループに結びついている。

この集団は上層階級の人達であり、少数且つ極端にルーズではあるが、バランスの役を演ずることができ、それによつて尽きせぬ大臣の予備軍である。小実業小産業の代表者は議員の総てによつて代表される。これらの代表者は統合された意志としての政府も議会も、また厳格な規律をもつた政党（共産党は例外）をももたないから、特殊利益は責任意識を全く持たずに弁護されるのである。こうして総ての議員は選挙区の有力者や集団の利益を満してしまふ。特殊利益の中央での競合は集権化が甚だしいだけに烈しい。地方的要求は地方当局で解決されずすべてパリ迄運ばれてしまふのである。

特殊利益の渦中に巻きこまれた政府や議会は勿論合理的政策を一貫して追求することができない。その暇がない。（予算審議が唯一の「政治」になつてしまふ）政府は思うままにならない議会とはできるだけ接触しまいとする。どうしても接触せざるをえな

い場合（予算審議）には政府はできるだけ気づかれぬようにし、議会には華々しい一般問題以外には討論させないようにする。フランスの統治と政治の秘密は、のつびきならぬ二者択一から逃れる巧みさ、物事を極端に迄進めぬこと、言葉と行動を区別することはある。この感覚は議会や裁判所における雄弁の背後には常に残されている。フランスでの話術は、何の結論にも達しないこと、ゲームであるということにある。こうして閣議は議会討論の代用となる。ところがこの小議會すら決定には達しない。そこで各大臣は自己の領分の中に閉籠り、討論も騒動もなく自己の権限の中で処する。知事大使その他高官連も同様に行う。彼らは自己の知識と良心に従い最良と判断するものをなさざるをえないのであり、政治意思が彼らを活動させるのではない。

イデオロギーに対する大衆の態度も同様のことか云える。古典的なジャコパンの雄弁に喝采を送るときにも彼らは熱狂した理想主義者ではない。彼らは多分の懷疑と打算的な現実主義によつて過剰なレトリックに対して防禦している。彼らは原理と実践とを鋭く且つ本能的に區別して考へる。彼らは新聞の記事を一言も信じないで読み、一年中記事を楽しみながら、反対派に投票することさえできる。彼らは政治家へのシニクかな不信から、演舌者を野心ある道化師としか考へない。後にのべるようにフランス人は

また釣合の感覚をもつてゐる。彼らにはロベスピエールの廉直さは子供つぽさであり、社会に有害でさえある。彼らは政治屋も信じはしないが、またイデオロギーの強行者も恐れ、輕蔑する。イデオロギーに対してこうした関心しかもたない大衆にとつて現実の政治的関心の対象及びそれを実現するプロセスはどこにあるのであろうか。その関心は原理の高遠さに比して較べものにならない程小さな日常的関心である。イデオロギーの反対物は責任あり、現実主義的な保守主義ではなく、地方的ないしセクト的な利益への関心である。では、彼らのレヴェルでは、政治はどのように行われているだろうか。

勿論フランスにおいても、巨大な、組織された集団（圧力団体）「公」の集団は存在する。だが、公の集団は大衆の間に存在する連帯関係とはなんらか次元が異なつてゐる。彼らの自発的な、「真」の連帯関係は「私」的集団の連帯関係、つまり、親族友人顧客、その他共犯者仲間からあらゆる「私」的な連帯関係である。現実の社会構造はこうした関係のネット・ワークからなつてゐる。イッシュューもこうした私的な、パーソナルな関係の中に投げこまれてコミュニケートされる。このコミュニケーションにおいては原理による鋭角的な討論も、冷徹な「客観性」に基づいた議論も行われぬ。討論は全人格的であり「ヒューマン」であつて、常

に妥協の可能性を前提している。理性論理感情正直主義真理等々は過度と釣合を保たねばならない。一杯のグラスを片手に持ち、ヒューマンに且つセンチブルに事を運べば、総てはうまくゆく、とはフランス人の箴言である。無数の小生産者をもち、二百五十万の自己充足的な、必要とあれば市場なしでも生きられる農家をもつたフランス、それは現代的意味での「マッセズ」をもたないし、インパーソナルな大衆組織もうけつけない。それは現代的いみで組織不能である。ところが、フランスにおける程自己の利益や生活を外部から防衛できた大衆はない。改革者や計画者に対してのみならず、征服者に対して（レジスタンス運動）すらも伝統的な秘密の武器、私的な関係のネット・ワーク、組織された無秩序によつて見事に防衛する。フランスは公の組織なしで防衛する或いは公の組織はかかるパーソナル・リレーションの上に形成されその限界によつて動揺する。

こうした諸条件はリーダーシップの態様をも規定している。こうした条件にかなう典型的なリーダーはピネーの如き人物である（クイーユ）。彼は五十二年の財政の不均衡から生れた危機においてフランスを一時的にせよ救つたといわれている。彼が組織の依頼を受けたときは、その場つなぎのためであつて各党に真面目にとられてはいなかつた。ところがラジオ演説をすることにより彼

は一夜にして国中の人気をさうらうことになつた。彼は小さな鞞皮工場の所有者であり、最初は未知数であり、しかも言葉少なであつた。彼は、レイノーと異なり党首でも政綱の提起者でもない、つまり「政治家」ではなかつた。彼は一箇のパーソナリティであり、「平凡なフランス人」であり、理想的な市民であり、善良な家長であつた。「方策は右にも左にもない。それはラベルをもたない。それは技術的なものであつて、政治の休戦のふんいきで施されねばならない」と、彼が云つたとき、この言葉は大衆の心に深くしみ通つたのである。こうして無数の団体が議員に圧力を加えて彼を支持させた。財政危機を突破する方策も全く大衆の「信頼」をより所とした。つまり、財政収支の赤字を国債——極度に保障つきのものであつたが——の発行によつて埋め合せようとするものであつた。彼は大衆の信頼への樂觀によつて将来に賭をしたわけである。この賭は相当に成功したのであつた。彼の内閣も一年程で崩壊してしまつたが、その場合にも責は「政治家」に帰せられてしまい、彼は「無きす」で残つたわけである。

フランスの政治、その中ではイデオロギーや原理は盛んに論ぜられておりながら、現実の利害とはかみ合わされずに空高く浮動している。イデオロギーは盛んに論ぜられても、特殊利益を抑制すべき与論は形成されず、政策の討論はない。イデオロギーや象

徴はラヂカルを兼ねながら、この国は旧來の特権にふれようとはしない。国全体は保守的でありながら、「保守」党は存在しない。英国より遙かに保守的でありながら、フランスはこれを政治意思として表明しない、或いはせいぜい制度の不機能という制度の「機能」によつて逆説的に「表明し」しているにすぎない。

* 勿論彼らは「政治」の外、社会や国家の要取を占めて強力な力をもつている。サン・ジェルマン通りやアカデミーのみならず、国家の要取、行政官のエリート、外交、軍隊は平民共和国とは別世界をなしている。

** MRPは新しい情況に対応した新しい政策（例えば国有化や社会保障）を打出した。シューマンはヨーロッパ統合という新しい問題に最も積極的な政治家である。

*** だが共産党はダイナミックな努力ともなりうることは後に紹介する。

フランスは農民や小さな町なしでは考えられない。だが、フランスは農業国以上の国であり、パリに文化実験室を備えたプロヴインス以上のものである。フランス人の知性、いつも変らぬ「偉大さ」への渴望、そして、レジスタンスの中で始まり解放後数年政治の舞台の中核を占きた諸勢力は、古いフランスに屈服することを拒否したのであつた。こうして新しい発条はかなり準備され

ていたし、加うるに客観的情況も、好むと好まざるとに拘わらず新しい情勢への適応を強ひずにはいなかつたのである。（こうした客観的な情況のうち植民地問題とヨーロッパ統合の問題とは* 大且つ緊急な解決を求めるものとなつた。リュテイもここに各一部ずつを当てている。しかしここでは独立に扱わず必要な個所に折込むことにする。）

* とりわけ後者にはリュテイは鋭い分析を試みている。「ヨーロッパ統合」という観念は、様々なニュアンスをもつてはいるか、少なくともそのリーダー（とりわけシューマン等）においては、それは、最も古い文化的伝統をもつが今や衰弱しつつあるヨーロッパを統合、強化して、それを先ずソヴィエト圏と対立させる、とともに更にヨーロッパのアメリカ化をも拓否する（しばしば第三势力的な含みすらある）ものであつた。従つてリュテイの解釈は「左翼」ないしナシヨナリスト達の批判（「アメリカ党」とは異なつて）である。

二 a

ド・ゴール（主として P. II, chap. 1, 2, 3, 4, P. IV, chap. 2）解放以来ド・ゴールは神話につつまれた。彼は、先ずレジスタンス運動の象徴であるとともに、連合国の中にあつてフランスの威信を高めたことによつて、フランスの「救世主」となり

フランスの偉大さの象徴となつた。この神話はその後もとだえることはなかつた。四十七年におけるゴリスムの急激な勃興はこのことを示している。元來彼は議會ないし議員輕視の傾向をもつていたし、首班となつてからも議會に対し痛然な批判を浴せ、執行権の強化をといた。このことは旧右翼の傾向と一致するところがあり、議員に対する大衆のシニシズムとも共通するところさえあつた。こうしたことが、危機においては、ゴリスムの方向へと反作用して行つたのである。ド・ゴールの権威的性格もこの場合重要な影響をもつた。ド・ゴールの神話は、裏返せば左翼の反神話となる。彼らの伝統的な共和制觀は彼の性格や言明とは対立するものをもつていたから、彼らはド・ゴールを旧右翼の再来ファシズムの再現とみてしまつたのである。

だが、リュテイによると、ド・ゴールと取巻き連及び支持者（なかでもジャンジャンブルのフランス）との間には、相互に誤解があつた。こうしてリュテイは、ド・ゴールの（反）神話とはかなり違つたド・ゴール像を描いてみせる。彼は旧右翼が夢みるような古い社会を実現しようなどというアナクロニストでも、凡庸な「政治家」でもない。彼は情況感覺をもつている。彼とフォロワ一の間には經濟についての見解の相異もある。モネ・ブラン（後述）は彼の首相時代に彼の支持の下で始められたのである。彼の

議會批判も、伝統的な共和制觀とは異なるとしても、責任あり効率の高い民主政治を欲する人々（恐らくリュテイも含めて）の見解とそれ程異ならない。彼は執行権強化をとく。だが、彼は権力を掌握する唯一の正当な方法が人民投票であると信じており、フランス人の深い伝統を体得している。それは現代の全体主義的パタンよりも、フランスに親しいパナパルティスムにより近い。

ド・ゴールが凡庸な政治家ではないとしても彼の方もまた制度や民衆の発条を知らなかつた。四十七年ゴリスムの波はフランスを押し去るかにみえたが、数年足らずで衰退の一途を辿るに到つたということは、ここに重要な原因があつた。四十七年に彼は当時自信も威信も全く喪失してしまつた議會が近い中に自滅してしまうだろうと信じた。従つて彼は敢て議會に手を加えることはしなかつた。彼は、フランスの議會というものは外部の干渉がなければ、いかは細々とであろうとも生きながらえるものだということを知らなかつたのである。破局の中で政治的に生長してきた彼は、政治を破局のタームでしか考えられないのであり、破局の中でしか情況を先取できないのであつた。ゴリスムの勃興ははこうした彼への期待とともに始まり、その衰退は、小康による大衆の関心の日常化と「政治」からの遊離、政治屋の「正常」な政治への復帰と並行する。議會の些細な手くだや大衆の日常的な関

心などは、凡そ彼の「政治」の領域には入るべくもなかつた。彼がアンガージュしようとする政治は巨人達の演ずる世界史の舞台でしかなかつたのである。

二九

共産党 (P. I, chap. 5, P. II, chap. 1, 2)

リュティイは戦後、経済の復興と発展が二つの道によつて可能であると考へている。その一つは東欧において典型的に実現されたもの、即ち前期資本主義的労働条件と国家による厳格な規律とを結合した「原善」の道であつた。東欧におけるフランス共産党の姉妹党はこの道を行つた。だがフランス共産党はそれを実現することができなかつた。解放直後それはこの道に進もうとした。だが権力を掌握し切つていない共産党がこうした政策を進めることはそれ自体逆説であつた。

前述したようにフランスでは一般に政治問題が情況との関連でイッシュューとされ離かつたのであつたが、このことは共産党についても例外ではない、というのがリュティイの見解である。彼の共産党批判は、共産党が情況とりわけ国際情況のリアルな認識を著るしく欠くということ、この結果として起らざるを得ない情況適

応の失敗のため、典型的にイデオロギーの政党である共産党が明確且つ一貫した指導理念をもてず常に動揺しているということ、従つてそれが労働者に対してさえ強力且つ責任ある指導を欠いたということ、にある。こうした共産党の指導の欠陥のため、共産党を支持した労働者さえ不満を組織できず、指導理念をもたないまま反抗と鋒起をくり返すことに終つてしまつた。労働運動の伝統——革命的サンジカリズムの傾向の再発は、共産党指導の失敗の論理的帰結であつた。

共産党のソ連との関係も共産党指導の欠陥の原因となつた。リュティイは一般に信じられているこの関係には余り深入りしていない。が少なくとも共産党がソ連とりわけコミンフォルムの意向に大きく影響をうけていたことは認める。共産党指導の動揺はよく云われているように独ソ不可侵条約の締結直後に起つた。ここでは共産党「正統派」は百八十度の政策転換というアクロバティックスを演じた。その結果起つた下部党員及び指導部の動揺はまぎれもないところであつた。

戦後共産党の辿つた道は、戦争直後の与党的立場から、四十七年の政権からの「追放」、四十七、八の大ストライキの指導、その敗失を通つて、以来ドグマチック・オポジションの立場「国内逃亡者」的立場に「後退」して行く道であつた。

解放直後の全般的な雰囲気には一種のユナニミティがあつた。国内レジスタンス派（共産党はこれの中で最も強力な抵抗組織をもつていた）と国外レジスタンス派（ド・ゴール派）とは確かに対立を含んでいた。にも拘わらず、ユナニミティの空気があつたことは否定できない。当時分裂は「それ自体ファシズムの刻印を押された」のであつた。分裂はまた連合国の干渉を招くかも知れないし、国際情勢もまだヤルタの精神が残つていた。ド・ゴール自身当時東西の仲介者たらんとしていた。こうしたユナニミティの中で共産党が占める地位は極めて大きかつた。ユナニミティは大衆の固執した頭の上に殉難者の亡霊が重くのしかかつてゐるためであつたが、共産党の殉難者が他を圧倒しているだけに共産党の地位は重かつたのである。実際「反共産主義はファシズムとされデモクラシーに対する恐るべき罪」とさえ考えられた。共産党の入閣はこうした空気の中で実現されたのである。では、共産党はこの当時何をなしたか。使用されたスローガンは「anti」で始まり「anti」で終る「ものであつた。そして「パーシこそは共産党のアルファンでありオメガであつた。共産党はパーシによつて「冷い革命」が成就されると信じていたかの如くであつた。こうした共産党の行動に対しリユティは痛烈な批判を加える。先ず、独ソ不侵条約以来の歴史を偽造し、しかも一貫して対独戦線を主張し

た「非」正統派（とりわけニザン）の名譽回復を行わなかつたこと、次に、パーシの強行に専念し、社会経済の構造変革に積極的合理的関心を示さず、革命の機会を逸し、政治上精神上の再生を主張しえなかつたこと、を批判する。

こうしたことの裏には、共産党による情況判断には大きな誤りがあつた。政権の一端を荷つていたこの時期で、共産党は現存体制が長年過去の体制とは異なっており（「国有化された石炭鉱業を昨日の資本主義的石炭鉱業と同じように考えるのは中傷である」）、議会民主主義により自己のイデオロギーを実現できると信じた（トレーズ）。こうしてそれは激発せんとしていた大衆と裏わけ労働者の不満をその強力な規律によつて押えつけた。「生産せよ、賃銀要求を出してはいけない」、これが党の指導方針であつた。こうして共産党への労働者の圧倒的支持は逆説的に革命を回避させてしまつたのである。勿論、他方では共産党は労働者の不満を賃上げによつて処理して行かねばならなかつた。選挙前ではとりわけこうした処置が必要とされる。こうした逆説に面して共産党の路線は転換に転換を重ね、複雑なチェス・ゲームを演ずることになる。組織労働者は、或る時は示威運動にかり出されるかと思えば或時はみじめな妥協に甘んずべく規律される。「ユマニテ」紙上で前日出された路線とは全く逆の路線が翌日出され

る。こうしたことは労働者の不安を増大させ、旧来のサンヂカリストは予測することのできない党のポリティカル・ゲームの中で戦術的な予備軍として使用されることに不満を抱くようになる。こうして四十七年のストライキはCGTの否認にも拘わらず強行され、次々に波及し、共産党の指導を離れてしまう。こうした情勢に而してついに共産党は政權から離脱するに到る。

共産党の「追放」は当然大混乱を惹起するものとみられた。共産党が離脱した政府には最早威信がなかつた。にも拘わらず共産党は大衆の反抗を組織しなかつた。それは、自己の「追放」が単に通常の議會政治に起る紛糾であり、再び入閣の機会が訪げれるものと考えていた。ストライキは益々激しく、合理的な経済的要求をこえるに到つた。賃銀増加が何程にも足しにならないことを知りながら、労働者はストライキを起してしたのである。にも拘らず、トリュティはいふ、「公の秩序が危殆に類するという事はなかつた。というのは、政府も無力であり無組織であつたが、反対派はそれにもまして無組織であり混乱していたから」。

國の内外、とりわけ國際情勢は共産党が予想した程甘いものではなくなつてきた。東西の分極化は進みつつあつた。こうした中でフランスも徐々に西側に向つてゆかざるを得なかつた。マーシャル・プラン受入れの決定はこの方向を最後の的に確認するもので

あつた。

共産党はこうした状況を認識するのが余りにも遅かつた。だがそれもコミンフォルムの結成以来一気に國際政治の中に巻きこまれてしまふとともに、それとの關係において國內政策の百八十度の転換を上げてしまふ。これ以後共産党の方針はドグマチクな体制反対派であり、「ウォール街への屈従」を拒否し、宿敵ドイツが西歐協調の一環に加わるのを否定し続けるショージュイニストとなつた。四十七年暮の大ジェネストないし暴動には共産党は労働者の上に指導力を回復した。だが、戦後共産党及び労働者が占めてきた位置を失うか、強化するかのこの事件で、共産党はストライキの指導理念を労働者に滲透させることができなかつた。ストライキも鋒起も何の「理念」もなく強行されたのであつた。四十八年の石炭産業のストライキは共産党の指導による最後の大きな攻撃であつた。この度の失敗は最早紛れもなかつた。共産党は「革命的解放」以来集積してきた力を悉く賭けてしまつた。それ以後の共産党の歴史は衰亡の歴史に外ならない。ヒステリカルに爆発させる体制への反逆にも早全く成功の望みがない。

にも拘わらずこの無力な時代においても、共産党指導下にあるCGTは労働者の最大の組織であつたし、共産党は國民共同体から追放されたけれどもなお國民の四分の一以上の投票を獲得して

ず、複雑な国際情勢、冷戦、北大西洋軍編成、ヨーロッパ統合、社会問題、福祉国家、高価な産業化計画、これらのものは厭うべきものであつた。「良き経済的な行政と健全な財政を我に与えよ！我が平和を維持し給え！」。ピネー、彼こそ「我が平和」を維持するリーダーとなつた。

リュティイはフランスが再生しえる道が二つあると考へた。一つは完全に計画された経済であり、他は、逆説的にみえるが実は前よりも遙に革命的である資本主義による道であつた。ところがこの二者択一は伝統的なスローガンや教義によつて隠蔽されてしまい、ありのままに取上げられることはなかつた。労働階級及び左翼インテリは、経済を知らず、フランス経済が資本主義であるとして、イデオロギー上資本主義の反対物に飛込もうとしてゐる。モネ・プランやマーシャル・プランが驚くべき努力により産業勢力の巨大な拡張を果し再興の条件を作つたことは否定できない。技術改善は農業ですら徐々に進んでいる。経済の自由主義化は確かに或る程度進められ、或る程度成果をあげることができた。だが、こうしてえられた諸々の努力も産業構造のガンを除去しえず、停滞してしまつた。「ベ・レール」pays réel つまりジャンジャンブルのフランスが近代化の決断を逃れ構造をゆさぶつ

てきた危機をひきのばし、増加する赤字を国内であろうと国外であろうと他に転嫁してしまふことに成功したからである。

三

今まで紹介したことを補足するいみでもあるが、それ以上にフランス文明一般についての評価、批判でもあるリュティイの見解を紹介する。(とりわけ P. I, chap. 4, P. IV, chap. 3)

フランス文明についてなされる判断には屢々全く相反するものがある。メシヤ的精神とパロキアルな精神、愛国心と個人主義。近代主義と懐古主義。理知主義と理性軽蔑。軽快や陽気さと、厳しさと暗さ。姦通小説やブルヴァールの生活と、世界に類のない堅実な家庭、等々。リュティイによるとこうした矛盾した判断は皆當つてゐる。だが一方を全体と考へてしまわなければ、の話してある。では、このような矛盾はどのようにして「一つにして不可分」なのであろうか。これをかりに、フランスには秩序があるのかどうかという問題におき換えて考へてみよう。

フランス人は最も個人主義的であるといわれる。個人は社会の慈善の対象ではなく、自己にしか責を感じない主権の個人であるとされている。こうした倫理をもつ社会では、国家はできる限り狭い限界の中に押込んでおかるべき敵である。社会的良心などと

云うものは言葉のあやにすぎない。プチブルやブルジョワの中の無宗教やその他の制度の無力さはこうした傾向を助長する。労働者もこうした傾向を分有しており、福祉國家なるものにはそれ程関心をもちない。

こうして一見全く無秩序にみえるフランスには、実は強力な秩序がある。「最も注目をひくフランスの秘密は、全く無秩序としかみえない外見の背後に極端にねばり強い秩序が滲み渡っているということである。この秩序は匿名であり無意識的であり不可視的であるが、抜け出ようもない網のように繪てのものを捕捉している。」祖先から伝えられ本能的と迄なつた反抗の觀念から、スピーチ、身振り、会話、料理、メニュー、飲物の選び等々に到る迄廠として秩序が存在する。では、こうした秩序はどのような発条の上にのつているのだろうか。先ず最初に、釣合 *proportion* の觀念があげられよう。釣合いの哲学は例えはこうである。機械文明の發展やそれに伴なう製品の規格化俗悪化に対して、手工のもの個性や巧みさを対立させ、人間の劃一化や専門化に対しては教育理念として、社会の有益な一員をつくることではなく、聰明にして完璧な人間、「オネトム」をつくることをとる。また釣合いの觀念は原理のもつ鋭角性を和らげ、妥協を可能ならしめる。フランス人にとっては自由は緩和された強制であり正義は修正さ

れた不正義であり秩序は修正された無秩序である。

秩序を維持する第二のものは到る所にはり巡らされたパーソナル・リレーションである。それは「公」的なものではなく、不可視的な「私」的なものである。こうした中で一杯のグラス片手に事が運ばれるというわけである。フランス文学は会話から、サロンやカフェから生れ、そこでは孤独な天才やファウスト的精神はなく、リリシズムの本流は生れない。また劇作家は劇場及び俳優とパーソナルな関係をもつている。ジロドゥはジュエのためジッドはパロリーのため、サラクルーはジュランのため、サルトルはアントワヌ劇団のために書く。社会の発条は不可視的な私的関係の中にあるというわけである。統計は用をなさず、それに基づく経済学や政治学は役に立たない。フランスでは文学が経済学や政治学の代りを受持つ。社会科学よりもバルザックの方が社会をよく伝える、というわけである。

無秩序の型がルーティン化されることによつて秩序が維持される。これが無秩序の秩序を維持する発条ともなる。内閣の「危機」もルーティンとなることによつて危機感を減殺する。斗争、激しい論争、低劣な悪弊さえ設定された形式やパターンやリアレンスに結合している。フランス文学は道德規範を作ろうとしない。それどころか極めて病的な描写を行う。だがそこに登場する人間は

種々のタイプの人間の目録にすぎず、それを描く文学者はモラリストという伝統的タイプの人間である。こうしたもの、これをしも文明というならそれは「自然」と同じ位当然のものとされ、余りにも当然すぎて衝動や義務感を呼び起さないから、「ルーティン」といつた方がよい。

こうしてフランスには無秩序を恒久的に維持していく秩序がある。この「組織された無秩序」の中でフランスはどのような社会の干渉に対しても獲得された地位を有効に防衛した。フランスは現代的意味でのマッセズをもたないし、彼らが通常用いる組織の能力ももたない。だが私的組織は巨大な「公的」組織を必要ならしめている。こうしたものをフランスにおいて「ヒューマン」な人間関係や「小さな」幸福を確保させたものである。しかしこの小さな幸福は現代的適応への決断から逃れ、ひたすら旧い社会への執着、日々凋落して行く社会への執着から得られたものであることに注意せねばならない。フランスの美しさはこうしたところにあるといつてよいかも知れない。ヴァレリイは凋落し始めた社会が生み出す文化の味について述べている。この文化には、安定した社会で存在する健康的な単純さもなく、社会が全く混乱してしまつた時に生れる全くの無秩序や激しい傾向もない。フランスはモンテスキューの時代から緩慢な没落の過程にあつた。この

過程の中では未だ存在する健康にして単純なものへのシニシズムは、常に妙味のあるイロニーと批判のブルルとなる。また「楽しかりしあの時代」の空想はセンチメンタリズムを常に養つておく。シヤンソンはこうしたシニシズムとセンチメンタリズムによる「小さきもの」の反抗となる。アメリカとドイツ、マス文明と能率文明はフランス人のこうした反抗に逢着する。彼らにとつて純資本主義や全体的計画経済はグロテスクであり非人間的である。そこでは人間は勞働の効率の荷い手であり、苛責なきグーヴィニズムの生ける道具にすぎぬ。総ては流動の中に投げこまれ伝統は拒否され「進歩」は盲目的に追求される。こうした強者の法則に對しあらゆる文明はそれをストップさせ、なんらかの持続的構造を結晶させ、「有^{プロファイタビリティ}益^性」以外の価値によつて測定される秩序を求める。この文明は物質的基準や生産性によつて測定するならば寄生的とならざるをえない。こうした観点からみればフランスはなお生きることの楽しさを十分にもつている。フランスのマス文明に對する抵抗、それは確かに盲目的利己心や特殊利益の追求とからみ合つている。が他面それは人間的なものであり個人の独立という觀念に根ざしている。こうして「甘き」「楽しい」フランスには無数の觀光客が訪ずれる。フランスがなければ西欧はマス文明に對する強力な抵抗の拠点を失うことになる。

だが、とリュティは云う。「効率」、それは人生の目的ではないが、効率の媒介がなければフランスは生存すらできないことになつてしまふだろう。「フランスの楽しさ」もまた失われ益々幻想以外のものではなくなつてしまふのではあるまいか。ではフランスは効率を高めることができるだろうか。恐らく現代では極めて困難であろう。だが、次の世代が成人に達する時(六五年)彼らは今日では困難な決断をなしえるかも知れない。そして現存体制をふきとばし、鉛のように重い「既得の地位」を政治のふるいにかけるようになるかも知れない。若い世代は寄生の殻の中で保護されながら、やがて蝶となつて大空を飛びまわるかも知れない。或いは殻の中で死に絶えてしまふだろうか。とまれフランスのユリート達そして恐らくリュティも、フランスの現実をこうした態度でしかうけとれないのであつた。

戦後、外国人によるフランス政治の研究は数多くあり、その中には極めて優れたものもある。異なつた文化の視点から眺められ異なつた方法論の上に立つたこれらの研究は、本国人にとつて当然のものときれ、しばしは盲点ともなつている発条をえぐり出し文化全体のダイナミズムの中核にふれることができた。D・トム

ソンは第三共和制についてこうした偉業をなしとげたのであつた。第四共和制については、既にピックル女史がある。勿論、リュティもこうした人々の中にいれることができるだろう。彼の方法はフランス「通」たちの専門家(Williams)やジャーナリスト(Wirth)のような記述的なものではなく、フランス社会の構造や発条に直接さぐりを当てる如きものである。彼は「素人」であるが、「素人」の大膽さは、マイナス(確かにある。例えばサルトルやカミュを余りに彼のシェーマの中で解釈しすぎている)としてよりもプラスとして仿っている。専門家は彼の著作をかみしめることによつて重要な結論をひきだせるだろう。彼の著作はこうしたものである。

イデオロギーと利益についての彼の分析は政治学者にとつて極めて興味のあるものであろう。フランスにおいてイデオロギー及びインテリが占める重要な地位は外国の研究者により屢々とり上げられた。こうした地位によつて一方ではフランスは賞讃的となつた(R. Matthews や高田博高氏)が、他方ではフランスはイデオロギー過剰の故に批判されることになつたのである(英国の多くの研究者、例えばピックルズ女史)。リュティはイデオロギー過剰と、正にその裏面である停滞的な特殊利益の横行を批判したのであつた。彼は——勿論イデオロギー自体を過少評価してい

るとは思われないが——こうした批判の裏に現実的であるとともに責任の意識をもつた保守主義の意義を予想せしめている。

こうした保守主義の確立こそは一定の段階においては、民主政治の有効な機能にとつて不可欠である。保守主義は、情況の同一性の「虚偽」表象、実は「情況化」(の細分化による)の連続性の上における場合、適切な情況適応を可能にする。まさにこうした場合にのみトータルなイデオロギー化ではなく、具体的特殊な「与論」が機能しえるのであり、しかも「与論」の形成は逆に情況の出現を細分化することができる。ところがこうした保守主義の性格は、情況化がドラスティックに進む場合には、却つて弱点ともなつてしまう。ここにエランを可能ならしめるトータルなイデオロギーの意義がある。だが、一定のエランがなされた後、ダイナミックな過程が責任ある保守主義に再び変容できないならば、社会は恒久の革命と反革命の繰り返しになつてしまふだろう。こうした中では革命の努力は無効となり、この無効性は大衆を無気力にするとともにイデオロギーに対するシニシズムをうむ。(特殊利益への耽溺はこの裏面に外ならない)こうしたところで流通するイデオロギーは、保守主義に内含される平凡な理念よりも、長期的にみれば、遙かに停滯的である。十八世紀の英国はまさに

こうした保守主義を形成することに成功した。フランスでは責任ある保守主義は生れることができなかった。保守主義には不可欠の二つの要素がある。一つは経験主義であり、他は経験の蓄積からえられた原理(イデオロギーですら)の尊重である。フランスでは両者は分裂してしまつた。原理、むしろイデオロギーの尊重は経験と事実の尊重を欠くために、ドグマチックな反動になつた。他方経験主義は、原理をもてないために、卑俗な「現実主義」と、「ジュスト・ミリュ」という似而非原理に基づく無責任なオポチュニズムに墮してしまつた。責任ある保守主義の不成立、それはフランスの悲劇の原因であり、そして同時にまた結果でもあつた。